様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：５３２０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２００５２

研究課題名（和文）ロシア正教古儀式派イコンにおける図像上の特徴に関する研究

研究課題名（英文）Study on the Iconography of Russian Old Believers' Icon Paintings

研究代表者
宮崎　衣澄（MIYAZAKI, Izumi）

富山高等専門学校・国際ビジネス学科・准教授

研究者番号：７０３６９９６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、18-19世紀のロシア正教古儀式派イコンをとりあげ、古儀式派イコンに頻繁に描かれたモチーフを整理し、同一のモチーフの国家正教会のイコンやイコン儀軌、ルボーク、写本挿絵等との比較、分析を通じて、古儀式派イコンにおける図像上の特徴を明らかにすることであった。古儀式派イコンの多くに通じるモチーフとして、古儀式派成立の教義の関わるもの（二本指の十字の印、キリストの綴り方）、1722年シノドが禁止した図像（聖クリストファー、三本手の聖母等）を分析した。古儀式派では一貫してこれらのモチーフが多く描かれた一方、国家正教会では時代によって古儀式派的モチーフの扱い方が異なることが分かった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to clear the unique characteristics and features of the icon paintings done by the Russian Old Believers'. To achieve this purpose, we focused on the iconography often drew on the Old Believers' icon paintings, and compared with the icon paintings by the Russian Orthodox Church and the Old Believers'. As the result, we found that the icons of Old Believers' often drew the themes about dogma of the Old Believe and the motives permitted by the Synod in 1722 (St Christopher with the head of dog, Virgin with three hands.) The Russian Old Believers' draw such themes of icon paintings till now. From the end of 19th century to the beginning of 20th century, The Russian Orthodox Church also drew the sign of the cross by two fingers, straightened in the icon paintings through the influence of the Slavophilism.

研究分野：美術史

キーワード：イコン　ロシア正教古儀式派　ロシア正教会

１．研究開始当初の背景

筆者はこれまでロシアでもあまり研究の進んでいない、ロシア正教古儀式派ヴィグ共同体のイコンに着目し、国立歴史博物館やアンドレイ・ルブリョフ美術館、ロシア美術館等ロシアの美術館での独自の調査に基づき、ヴィグ共同体のイコンに共通する特徴を明らかにする研究を進めてきた。古儀式派イコン研究を進めるなかで、現在の研究にはいくつかの問題点があることが明らかになった。

その中でも重要な問題は、古儀式派イコンか否かの推定の難しさである。現存するイコンの多くは来歴や制作地が明らかにされておらず、一見しただけでは古儀式派イコンであると推定することが困難である。とりわけ18 世紀以降のイコンは、家庭用や小礼拝堂用などに大量のイコンが制作され、ロシア各地に流通していた。しかし古儀式派信徒は国家正教会のイコンを受け入れなかったため、自分の流派のイコン画であることを示す何等かの「印」があったはずである。例えばシィズラン派では、枠帯の特徴的な装飾文様によって、イコンが古儀式派のシィズラン派の手によることを示していた（A.A. Кириков. Сызранская икона. Самара. 2007.）
シィズラン派のような明らかな特徴は稀な例であるが、古儀式派に共通する、もしくは古儀式派が好んで描いたモチーフや図像的特徴を示すことができれば、古儀式派イコンと推定する上で大きな手掛かりになると考える。

これまでのロシアにおける古儀式派イコン研究は、ヴィグ共同体、ヴェトカなど主要な古儀式派拠点ごとの特徴を明らかにすることを主眼とした様式研究が主流であった。加えて、古儀式派イコン研究は、所蔵する美術館ごとに分断されている例が多く、古儀式派全体に共通する傾向や特徴に関しては、H. ピヴァヴァローヴァが先駆的に研究を行っているものの、これから進展が期待される分野である。このような背景から、筆者は古儀式派イコンの特徴を把握するために、聖人マクシム・グレクを描いた古儀式派と正教会のイコンを比較し、図像の違いや独自性に込められた宗教的思想と背景について考察してきた。その結果、古儀式派イコンには、顎鬚の強調や「２本指の十字」のテキストなど、正教会のイコンにはない古儀式派思想に関するモチーフが付加されていることが明らかになった。

２．研究の目的

本研究の目的は、次の通りである。
18-19 世紀のロシア正教古儀式派イコンをとりあげ、（１）古儀式派イコンに頻繁に描かれた独自性のあるモチーフを整理し、(2) 同一のモチーフの国家正教会のイコンやイコン儀軌、ルボーク、写本挿絵等との比較、分析を通じて、(3) 18-19 世紀の古儀式派イコンにおける図像上の特徴を明らかにすることである。

３．研究の方法

本研究では、18-19 世紀ロシア正教古儀式派のイコンにおける図像上の特徴を明らかにするために、次の研究方法をとった。
（1）古儀式派イコンを調査・蒐集し、頻繁に描かれるモチーフや特徴的な図像を整理する。
（2）同一のモチーフを描いた国家正教会のイコンや儀軌と比較し、古儀式派の図像上の特徴を明確化する。
（3）文献資料や手書きルボークを参照し、古儀式派図像に込められた思想や背景を考察する。

４．研究成果

本研究の成果は以下のとおりである。はじめに古儀式派イコンに頻繁に描かれるモチーフのうち、古儀式派教義に関わるものを検討した。古儀式派イコンの特徴として、はじめに信仰にかかわるシンボルが描かれていることがあげられる。具体的には八端の十字架、ＩＣというキリストの綴り方、人差し指と中指の二本による十字の印である。これは国家正教会との大きな差異であり、すべての流派に属する古儀式派の特徴である。これに加えて、四福音書記者のシンボル（テトラモルフ）にも特徴がある。北部ロシアの著名な古儀式派ヴィグ共同体（1694-1856？）で編纂された『ポモーリェの返答』（1722 年）には、テトラモルフについて次のように記されている。

「・・・古い教会本、印刷本ではマタイは人間の顔で、マルコは鷲の顔で、ルカは雄牛で、ヨハネは獅子で描かれていた・・・新しい印刷本ではこの古い教会の習慣が変更され、ヨハネが鷲の顔で、マルコが獅子で描かれる・・・ 」

つまりポモーリェ派の主張では、古来ロシアではマルコは鷲の顔、ヨハネが獅子で描かれていたのが、後代のカトリックの影響をうけたイコンでは、マルコは鷲の顔、ヨハネが獅子と入れ替わって描かれているという。現存するイコンを見てみると、1310 年代にアンドレイ・ルブリョフが描いたイコン≪救世主≫では、向かって右上に「鷲」で、左下にヨハネは「獅子」で描かれている。次に 18 世紀初期のキジ博物館所蔵のイコン≪救世主≫をみると、向かって右上にヨハネは「鷲」で、左下のマルコは「獅子」で描かれている。キジ博物館の≪救世主≫は、ポモーリェの返答が編纂された 18 世紀初頭に、テトラモルフがカトリック風に変化したイコンが描かれていたことを示している。しかし、すべての古儀式派イコンにおいて、ポモーリェの返答が主張するやり方でテトラモルフが描かれているわけではない。従ってマルコを「鷲」、ヨハネを「獅子」として描くテトラルフは、古儀式派イコンの可能性を示す手掛かりの一つである。

次に二本指の十字の形について検討した。古儀式派というと二本指の十字の型がよく知られているため、二本指の十字が描かれたイコンがすべて古儀式派イコンであるようにとらえられることがある。しかし、二本指の十字＝古儀式派イコンではない。二本指の十字とは、高位聖職者が祝福を与える手の形（Именословное перстосложение）で、親指と薬指を合わせる形と、人差し指と中指を合わせて上に上げる形の二つがあった 。しかし、1666－67 年に行われたモスクワ教会会議で二本指の十字が禁止されて以降、親指と薬指を合わせる形が国家教会のイコンで主に使用されるようになった。そのため、国家正教会では人差し指と中指を合わせる二本指の祝福の形が描かれたイコンが、教義に合わないとして描きなおされる例もあった 。しかし、1800 年にединоверие（帰一派）が誕生してから、国家正教会は二本指の祝福に無関心になった 。Единоверие とは、典礼の方法は古儀式派と同じ旧来の習慣を保持しつつ、国家正教会の教会制度を容認して国家正教会の位階を受け入れた流派である。единоверие の誕生により、二本指の十字架イコール古儀式派で、異端という図式は成立しなくなった。また 18 世紀末以降のロシア古来の伝統や文化に対する興味の高揚により、この時代に描かれたイコンには、意識的に古いイコンスタイルを再現することに注意を払い、ニーコン以前の伝統に沿って二本指の十字が描かれている例も少なくない。この流れをうけて 19 世紀中期には、「古い手のポーズ（二本指）がすべての古いイコン、特に正教会で崇敬されているものにあり、没収の対象にはならない 」と公的に認められるようになった。従って二本指の十字の形は、古儀式派である可能性を示す一つの手がかりにはなるが、それだけで古儀式派イコンであると断定することはできないのである。

次にイコンの主題における特徴を分析するために、教会規定に関する文献資料の分析をおこなった。国家正教会から発令された教会規定のうち、イコンに関わるものとして 1551 年百章会議、1666-7 年モスクワ教会会議、1722 年宗務院の規定を取り上げ、イコンに関する記述をおもに分析した。古儀式派の主張として、1722 年ポモーリェの返答に着目し、イコンに関する章のほか、四福音書記者のシンボルの描き方を記した部分を翻訳し、国家正教会の教義と比較した。古儀式派は、ニーコンの改革以前に行われた 1551 年百章会議の規定を遵守するが、1666 年モスクワ公会議と 1722 年の宗務院規定には従わない姿勢である。1551 年百章会議では、イコン画家の生活態度や古い手本通りに描くべきといった記述があるものの、具体的な図像に関する記述はない。一方 1666-7 年モスクワ教会会議では、禁止するイコンのテーマを具体的に例示している。第 43 章で≪ヤハウェの神≫の図像について、今後は描かないようにとしている。理由は誰も父なる神の肉体をみたことがないからとしている。しかし、実際には国家正教会においても古儀式派においてもヤハウェの神の図像が描かれ続けており、この禁令はあまり徹底されなかったと考えられる。次に 1722 年宗務院の規定では、今後禁止する図像が多く列挙されている。≪聖殉教者クリストファー≫、≪三本手の聖母≫、≪天地創造の 6 日間≫、≪父性≫、≪燃え尽きざる藪の聖母≫、≪神の英知≫等である。この禁令から、イコンにおける民間信仰や史実、自然の摂理に反する描写を排除しようとする狙いがうかがえる。宗務院の禁令後も、国家正教会においても禁止された図像が制作されたことは、現存するイコンから明らかである。しかし、古儀式派においてはより長く禁止された図像が描かれ続けた。≪聖クリストファー≫は古儀式派聖堂にも配置されるなど、古儀式派信徒のお気に入りのモチーフである。1722 年の宗務院規定により国家正教会ではあまり描かれなくなった図像が、今日に至るまで古儀式派の間で描かれ続けている。従って、古儀式派イコンに頻繁に描かれる特徴的な図像の中に、国家正教会で禁じられた図像があることが分かった。

次に、これらの古儀式派が好んだ図像について、国家正教会のイコンにおける図像と比較した。その結果、国家正教会ではイコンの制作時期によって、モチーフの扱い方が異なることがわかった。1757 年サンクトペテルブルグに芸術アカデミーが設立され、イタリア美術を手本とする西欧美術アカデミーの様式が、美の規範と考えられるようになった。教会画においても西欧美術の影響は著しく、首都ペテルブルグの聖堂は美術アカデミーの著名な教授が描いた宗教画で飾られた。イタリアのバロック画家グイド・レーニ（1575-1642）の『いばらの冠をかぶったキリスト』、スペインバロックの巨匠ムリーリョ、イタリア盛期ルネサンスを代表するラファエロの『小椅子の聖母』などの西欧宗教画を基にしたイコン画が多数出現した。そのため 18-19 世紀初期は、油絵を使用した西欧宗教画風のイコンが主流を占めていたため、古儀式派の好んだ伝統的主題やモチーフの使用は、特にペテルブルグ等大都市においては稀であった。従って、この時期は古儀式派が好むモチーフの使用、伝統的図像、テンペラ画による伝統的技法によって、古儀式派由来のイコンである可能性が考えられる。

このようなイコンの行き過ぎた西欧宗教画化を懸念する動きが、19 世紀中期に首都の知識層の間に広まる。中世ロシアの教会を飾ったモザイク、イコン画の伝統的な制作方法は当時すでに忘れられていた。そこで 1851 年美術アカデミーにモザイク教育施設ができる 。続いて 1856 年には美術アカデミーに正教イコンのクラスができる。正教イコンク

ラスの設立には、1859 年から 1872 年まで美術アカデミーの副総裁を務めたＧ．Ｇ．ガガーリン公爵（1810-1893）が尽力した。彼は画才があり、ビザンツ主義の信奉者であった 。1840 年末にマリヤ・ニコラエヴナ大公女（1819-76）にイコンクラス設立の重要性を進言した結果これが認められ、4000 ルーブルが割り当てられた 。しかし、アカデミーの教授陣は、ビザンツ美術の模倣は絵画の衰退をもたらすとして反対し、ガガーリンが望むイコンクラスの設立は困難を極めたという 。イコンクラスの指導者には、結局美術アカデミーの教授ネフが就任した。ネフは前述のようにイサク聖堂の教会画によりロシア美術アカデミーの教授になった人物である。現存するネフの作品から、彼がガガーリンの目指すイコンクラスの教授としてふさわしいかについては疑問があるが、当時このクラスを指導する能力がある、もしくは指導を希望するアカデミー教授がいなかったことを示していると考えられる。新しくできたイコンクラスでは、中世ロシア美術やビザンツの作例を提示するために蒐集する必要が生じ、1859 年に歴史と考古学の教授として美術アカデミーに招かれたＢ．Ａ．プロホロフ（Ｐｒｏｘｏｒｏｖ：1818-82）が「中世キリスト教美術館」創設の指揮をとった 。彼は新美術館を「中世ロシア美術館」と改名し、コレクション蒐集のために 1863-75 年にロシア各地へ調査蒐集旅行に出かけた。美術館には、古儀式派の祈祷所で没収したイコンやアテネの修道院のフレスコ画からとった写し等もあったという 。

19 世紀中期におけるイコンの伝統的様式への回帰を如実に表しているのが、ペテルブルグの大理石宮殿聖母神殿奉献教会のイコノスタシスの例である。1849 年教会の成聖にあわせて、当時著名な美術アカデミー画家であったＭ.И．スコッティ（Ｓｋｏｔｔｉ：1814-61）、Ｋ．ドウジ（Ｄｕｚｉ：1803-60）らが、64 のイコンからなる 4 層のイコノスタシスを制作した。しかしわずか 3 年後の 1852 年、コンスタンチン・ニコラエヴィッチ大公（1827-92）は、同教会用にＢ．ペシェホーノフに伝統様式でイコンを描かせ、アカデミー画家のイコンをほぼすべて取り外させたという 。伝統的イコンへの急速な関心の高まりが窺われる。しかしここで留意しなければならないのは、19 世紀中期は中世ロシア美術やビザンツ美術への関心が高まり、研究や復興の対象となり始めた時期であり、より本格的な研究や蒐集活動は 20 世紀に入ってからであるということだ。当時フレスコやテンペラによる画法に関心が集まったものの、多くの首都の知識人は、ノヴゴロド派やモスクワ派のイコンなど、本来の伝統的イコンに関する知識をほとんど持っていなかった。19 世紀中期における中世ロシア、ビザンツ様式は、西欧の図像的源泉の直接的な借用から離れ、ビザンツやロシアのイコンへの事実上部分的な回帰であったと、ベーリクは指摘している 。（Ж. Белик. Иконописное наследие Мастерской Пешехоновых. М., 2011.）19 世紀のイコン画家にとって、ビザンツや中世ロシアのイコンから取った下絵が、重要な図像的源泉であった。その結果、古儀式派が好んだ伝統的図像が、国家正教会のイコンにおいてもしばしば描かれるようになる。さらに、ロシア的伝統を保持しているのは古儀式派であるとの考えが知識層の間に広まり、古儀式派は古い伝統の保持者とし、これまでとは異なる視点で注目されるようになる。レスコフの小説『封印された天使』（1873 年）において、古儀式派の古いイコンに対する知識の深さが肯定的に描かれており、作家レスコフは古儀式派のイコン画家と親交があったことが知られている。古儀式派イコン画家の活躍の場は拡大を続け、19 世紀後期には腕の良いイコン画家は宮廷や国家教会の注文を受けてイコンを制作した。一例を挙げると、亜使徒ニコライの依頼をうけて東京復活大聖堂（ニコライ堂）のイコノスタシスを制作したヴァシーリィ・ペシェホーノフ（1818-1888）は有名な古儀式派家系の出身者であるにもかかわらず、宮廷イコン画家として皇帝家族の身丈イコンを数多く制作している。また古儀式派出身でムスチョーラにおいてイコン画を学んだディカリョフ（？-1917 年以降）はモスクワへ移住し、皇帝家族の注文を受ける一流のイコン画家になった。ディカリョフが 19 世紀末～20 世紀初頭にペテルブルグの大理石宮殿の聖母神殿奉献教会用に描いた聖人歴シリーズでは、聖人は古儀式派の主張する二本指の十字の手の形で描かれている。ディカフョフは古儀式派との繋がりも保ち続け、古儀式派司祭派の最大拠点であるラゴージュスコエ墓地の聖母庇護聖堂のイコンを、チリコフ（？-1903）と共に修復している。これらの例が示すように、19-20 世紀初頭のロシア社会において、古儀式派とそのイコンは、古いロシアの伝統文化の担い手として再解釈されるようになった。その中で、古儀式派が主張する二本指、キリストの ＩＣという綴り方が描かれたイコンは、それだけでは没収の対象にはならず、国家正教会や皇帝周辺といった公的な場所でも認められるようになったことが明らかになった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）


宮崎衣澄　「古儀式派のイコンについて」セーヴェル、第 30 号、36-47 頁、2014 年(査読無し)

宮崎衣澄　「イコンにおけるマクシム・グレク－ロシア正教古儀式派のシンボルとしての図像形成－」ロシア語ロシア文学研究、第 45 号、116-138 頁、2013 年（査

読有）

〔学会発表〕（計　2　件）
宮崎衣澄　「日本ハリストス正教会東京復活大聖堂（ニコライ堂）の旧イコノスタシス研究」、日本ロシア文学会第 64 回全国大会（於：山形大学）、2014 年 11 月 1 日
宮崎衣澄「古儀式派のイコンについて」、第 2 回古儀式派研究集会（於：富山大学）、2013 年 5 月 25 日

〔図書〕（計　2　件）
宮崎衣澄,中澤敦夫　『西田美術館のロシア・イコン（調査報告書）』、西田美術館、2013 年、全 265 ページ
宮崎衣澄,中澤敦夫　『暮らしの中のロシア・イコン』、ユーラシアブックレット 176、東洋書店、2012 年、全 63 ページ

６．研究組織
(1)研究代表者
宮崎　衣澄（MIYAZAKI IZUMI）
富山高等専門学校・国際ビジネス学科・准教授
研究者番号：70369966
(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし